

図 2-2-6.(6) ハリケーン「IVAN」経路図(2004年9月)

## (2) 地形条件

### 1) オウイア湾周辺の地形特性

オウイア湾は大西洋に面する北東側を開口部とする半円状の湾(湾直径距離 700m、奥行き約 500m)であり、湾口部水深約 30m付近から急深となっている。この急深水域は現地漁民の手釣りによる良好な魚場としても利用されている。湾奥には約 15m~20m幅の巨礫海岸が延長約 450m に渡って形成されている。また同湾岸部はスフリエール山の山麓に位置しており、平坦部の少ない斜面や急崖地形が多く、火山活動を示す火成岩やレキ混じりの凝灰岩で構成されている。計画地背後は内陸に向かって急斜面となっており葛農地として利用されている。計画地北側のソルトポンド岬側の急崖前面では約 50m 幅の浅瀬が広がっている。

オウイア湾周辺の地形特性を図 2-2-6.(7)に示す。

### 2) 計画サイトの地形特性

計画地はオウイア湾奥部のドライリバーとリトルリバーの間に位置する延長約 150m、幅約 70m(背後道路から礫浜水際線まで)の敷地である。図 2-2-6.(8)及び図 2-2-6.(9)に示すように計画地の断面構成は、「背後道路」-「家屋」-「椰子林」-「巨礫海岸」-「巨礫混じり砂」-「砂」となっており、全体的に椰子林~巨礫海岸にかけての勾配がきつくなっている。また、計画地の北側から南側にかけては緩勾配となっており、地盤高が低く広い用地が形成されている計画地の南側用地においては、巨礫海岸背後近くまで家屋が設置されている。

聞き取り調査によるハリケーン時の波の打上げ高さは、B-B 断面の椰子林先端部+5m 付近までであり、比較的到家屋設置地盤高の低い計画地南側用地(C-C 断面)でも+5~+6m付近は全く被害を受けていないことが分かった。なお、既存船揚場となっている Ex-Ex 断面を見ると+2.5m~+5m 付近の斜面上がボート置場として利用されている。

### 3) 巨礫海岸特性

図 2-2-6.(8)に示すように、オウイア海岸の礫径は 20cm~80cm となっており既存船揚場の北側が最も礫径が小さく、南側に向かって大きくなる傾向がある。特に既存船揚場に隣接する「Bゾーン」と計画地南側の「Dゾーン」の礫径がほぼ同等となっている。巨礫の存在は、周辺海岸の状況や聞き取り調査を勘案すると、海岸侵食作用により元の地質が現れ、波の影響で角が取れた巨礫丸石となったと想定される。また海底の巨礫には 10cm 程度の藻類が付着していることから巨礫の移動は少なく安定している状況にある。

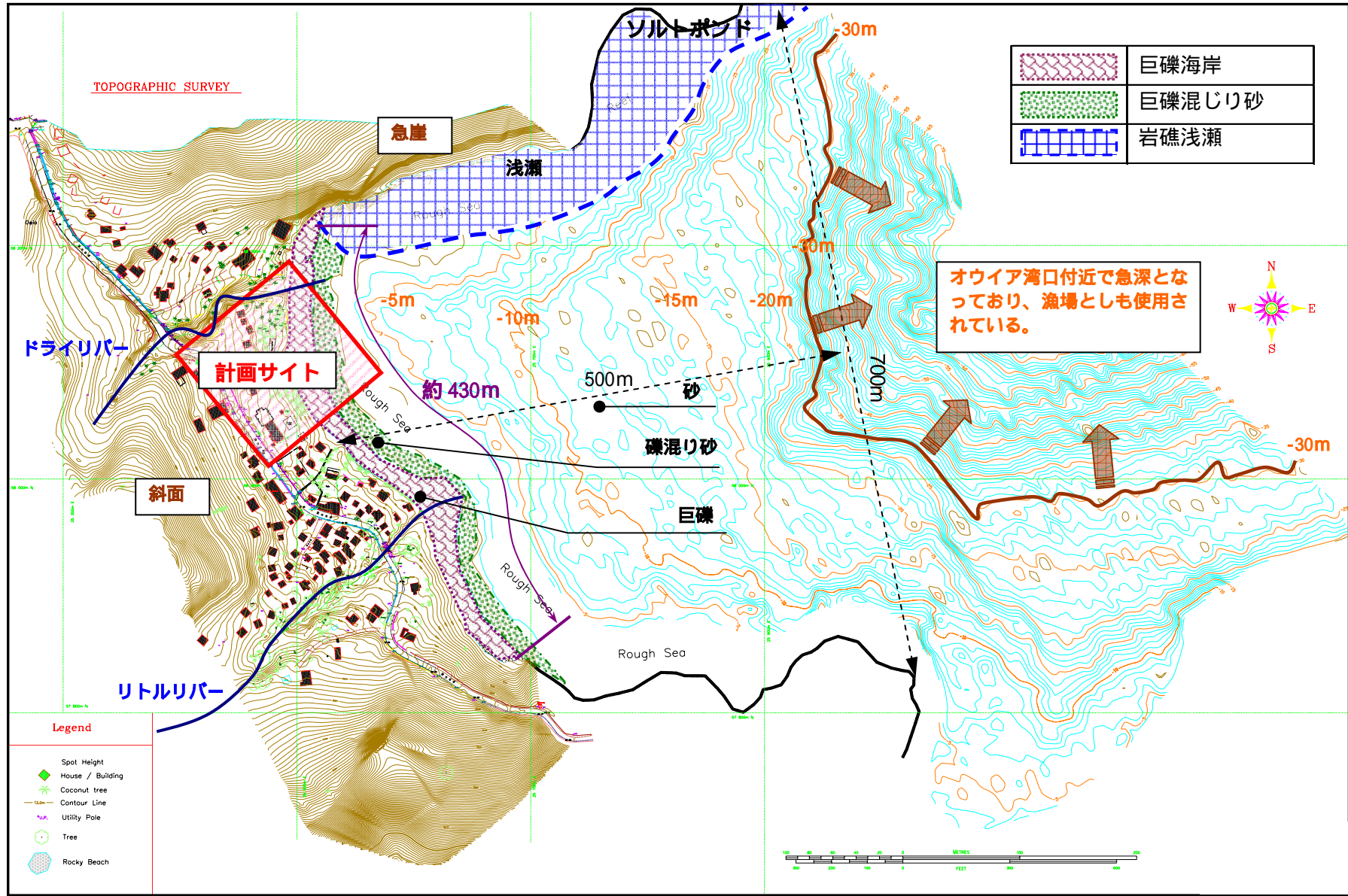


図 2-2-6.(7) オウイア湾周辺の地形特性